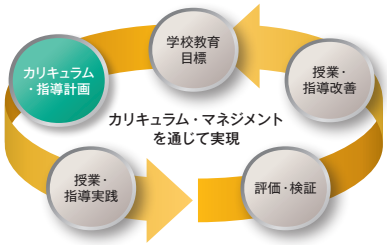
先進事例1

静岡県立御殿場高校

自校の現状分析を踏まえて学校教育目標を策定し、学科・教科横断で指導改善を推進



静岡県立御殿場高校は2018年度、カリキュラム・マネジメントを推進する体制の整備に着手し、教師間での議論だけではなく、生徒や保護者、地域の声も取り入れながら、育成を目指す資質・能力を練り上げていった。あらゆる教育活動を通して、学校教育目標として掲げた資質・能力を育成できるよう、全学科・教科を横断した取り組みを強化している。

学校・生徒の実態を多角的に把握し、学校教育目標を策定

静岡県立御殿場高校は、創造工学科・創造ビジネス科・生活創造デザイン科の3科から成る学校だ。以前は、各科が独自に方針を立てて教育活動を行うことも多かったが、2018年度から、カリキュラム・マネジメントを推進する体制の整備に力を入れている。渡森和彦副校長は、その背景を次のように語る。

「19年度から『高校生のための学びの基礎診断』の実施が始まり、22年度からは新学習指導要領が年次進行で実施されるなど、高校教育改革における具体的方策の実行が続きます。そうした大きな変化に学校が適切に対応するためには、カリキュラム・マネジメントを通じて全教師が目線を合わせ、教育活動を充実させていく必要があると考えました」

最初に取り組んだのは、教育活動の構造化だ。同校が大切にしてきた教育活動が、新しい時代に必要な「21世紀型能力」や「生きる力」にどのように結びつくのかを教師間で議論し、それらの関連性を図示した「学びのピラミッド」（**図1の下**）を作成したと、教務主任の菅原尚規先生は説明する。

「学校全体の教育のあり方を考えるためには、各教育活動の個別の役割だけではなく、それらの相互のつながりを意識することが重要です。教師一人ひとりに教育活動を構造的に捉えてほしいと考えました」

次に、同校が具体的にどのような資質・能力を「21世紀型能力」「生きる力」として位置づけるのかを検討するため、教師間ではまず、学校・生徒それぞれの強みと課題を協議した。例えば、学校の強みとしては、「進路指導と生徒指導を両輪とする生徒育成の柱が整っていること」などが挙がり、力を入れている取り組みの意義について改めて共通認識を図れる機会になったと、服装指導「服育」担当の小川修平先生は話す。

「身だしなみの大切さを自覚できる生徒を育てるという方針を3科で共有し、『服育』に取り組んでいます。教師一人ひとりが、服装に課題があ

静岡県立御殿場高校

◎校訓に「質実剛健にして美しく」を掲げる。工業・商業・家庭の3科を擁する県内唯一の専門高校。専門教科の学習を通して「地域の未来を創造する人材」を育成している。

◎設立　1902（明治35）年

◎形態　全日制／創造工学科・創造ビジネス科・生活創造デザイン科／共学

◎生徒数　1学年約200人

◎2019年度進路実績（現役のみ）　私立大は、文教大、千葉工業大、関東学院大、横浜商科大、常葉大などに11人が合格。短大、専門学校進学51人。就職124人。

◎URL　http://www.edu.pref.shizuoka.jp/gotemba-h/home.nsf

る生徒と向き合い、何が、なぜ課題なのか、振り返りを行わせることに重点を置いています。そうしたきめ細かな生徒指導は、今後も継続・発展させていこうと、全教師の考えが一致しました」

副校長
渡森和彦
わたもり・かずひこ
教職歴31年。同校に赴任して2年目。

教務主任
菅原尚規
すがわら・なおき
教職歴22年。同校に赴任して2年目。国語科。

2学年主任
美那川雄一
みながわ・ゆういち
教職歴15年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。

教務課・「CAP」担当
坂本泰三
さかもと・たいぞう
教職歴9年。同校に赴任して8年目。美術科。

創造性育成担当
坂本貴志
さかもと・たかし
教職歴7年。同校に赴任して8年目。工業科。

生徒課・「服育」担当
小川修平
おがわ・しゅうへい
教職歴6年。同校に赴任して7年目。保健体育科。

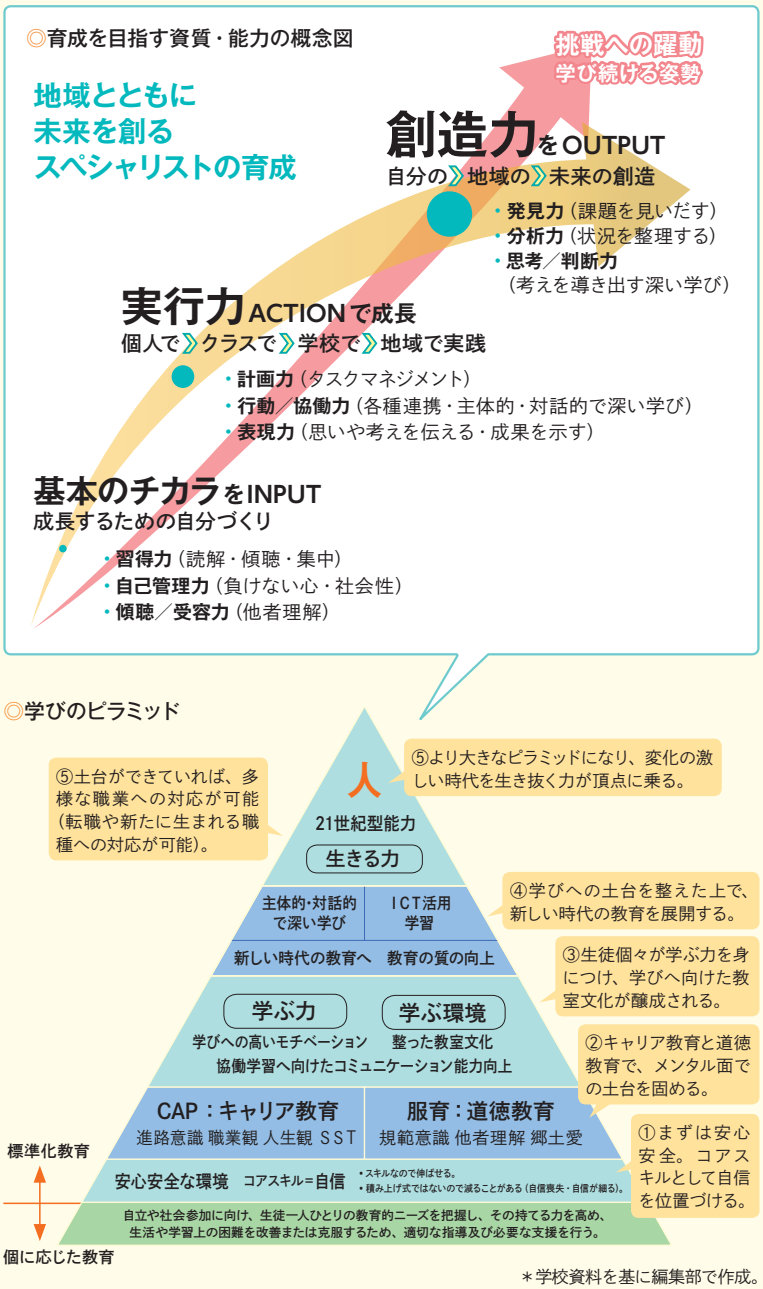
情報研修課
神谷隼基
かみや・としき
教職歴3年。同校に赴任して4年目。数学科。

会の役員や1・2年生の学級委員らが、「なぜ、御殿場高校に入学したのか」「卒業後、どのような自分になっていたいのか」などを語り合うワークショップを行ったりした。

そして、一連の検討の結果を総合し、「地域とともに未来を創るスペシャリストの育成」というスローガンを打ち出すとともに、その実現に必要な資質・能力として、「習得力」「計画力」「発見力」などの9つを設定した（**図1の上**）。

「特別活動も含めた様々な教育活動の目標として設定できるものになるよう、資質・能力の名称にこだわりました。例えば、『読解力』ですが、本校での指導の中で大事にしたい『傾聴力』『集中力』と合わせて、技術や知識を身につける力『習得力』としました」（渡森副校長）

図1　御殿場高校が育成を目指す資質・能力



＊学校資料を基に編集部で作成。

多様な教育活動を関連づける「教科横断推進研修」

育成を目指す資質・能力の具体化により、全校体制での資質・能力ベースの指導改善が本格化した。例えば、各教科団では、必履修科目を中心に22年度1学年からの教育課程編成表（図2）を試作し、新学習指導要領で学習する各分野・単元において、同校が策定した9つの資質・能力のうち、どの資質・能力を育成するのか、その対応などを示した。

資質・能力の育成を軸に据えた、教育活動の関連づけも強化している。その原動力となっているのが、年数回、全教師から希望者を募って実施する「教科横断推進研修」だ。

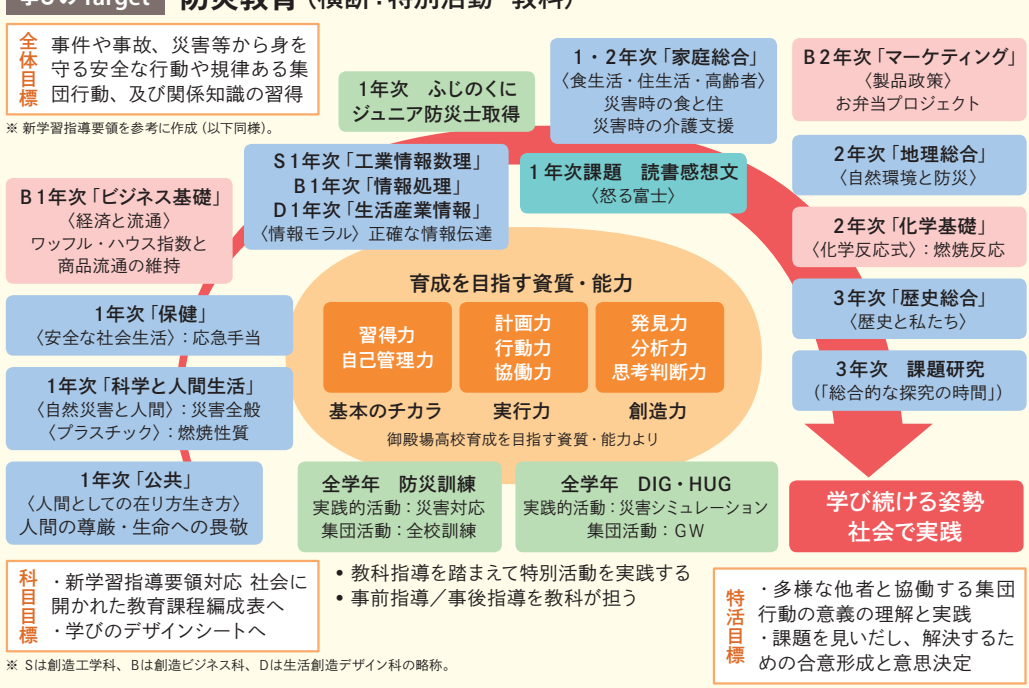
同研修は、17年度、地理歴史・公民科や数学科といった普通教科の若手教師やミドルリーダーが始めた。当初の参加者は普通教科の教師のみだったが、普通教科の教師は専門教科の教師一人ひとりに声をかけ、参加を働きかけた。例えば、工業科の教師には、授業で製作する様々な機械の図面を見せてもらうとともに、図面の理解と密接にかかわる数学や物理の学習内容を聞き、工業・数学・物理の関連性をテーマにした研修を企画することで、関心を持ってもらおうとした。そうした働きかけの結果、研修に参加する専門教科の教師が増え、多様な教科の教師が協働する機会に発展していったと、研修を主導してきた1人である地理歴史・公民科の美那川（みながわ）雄一先生は語る（＊）。

図2　新学習指導要領に対応させた教育課程編成表の例（第1学年「公共」）

大区分	中区分	科目・特別活動の視点	4～5月	
基本の力	習得力	教科書の文章や図表、グラフを正確に読み取り、情報を理解する。	◎	◎
	自己管理力	—		
	傾聴／受容力	他者の意見や主張を聞き、受け入れる力	○	○
実行力	計画力	—		
	行動力	—		
	協働力	課題解決に向け、グループワークに参画する力	◎	
	表現力	自らの考えを論拠に基づき主張する力		○

同校が育成を目指す資質・能力の中から、各教科・科目の単元ごとに特に育成を目指す資質・能力を◎や○で表示。特別活動についても同様に作成する。また、新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」を実現すべく、「地域の物的資源を活用した学び」「地域の人的資源を活用した学び」などの項目も設けた。　＊学校資料を基に編集部が一部改編。教育課程編成表「公共」の全容は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp）でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」でご覧ください。

図3　「教科横断MAP」の例



「学びのTarget」は、「創造性の育成」「読解力の育成」「防災教育」「思いやりの育成」「地域理解」「規範意識の育成」の6つを設定。2022年度の教育課程編成表と対応させられるよう、新学習指導要領における教科・科目や様々な特別活動を横断しながら、資質・能力を育成する方策を検討した。

＊学校資料を基に編集部で作成。

＊ 美那川先生のご実践は、本誌2019年6月号P.10～13でご紹介しています。

「読解力や論理的思考力など、全教科で育成される資質・能力は多くあります。教科を横断した研修を強化すれば、そうした資質・能力のさらなる育成につながります。普通教科の授業は3科すべてに設置されているため、まずは普通教科の教師が動き、各科の教師に働きかけました」

全教師の3分の2にあたる約30人が参加した19年10月の希望研修では、重点的に取り組みたい「学びのTarget」として、「創造性の育成」「読解力の育成」「防災教育」などの6つの観点を設定。教師は観点ごとに教科混合の5人1組のグループに分かれ（**写真**）、各観点における目標を達成するため、3年間を通して各教科の授業や特別活動をどのように結びつけ、どんな資質・能力を育むのかを体系化した「教科横断MAP」（**図3**）を作成した。今回の研修を主導した情報研修課の神谷隼基（かみやとしき）先生は、そのねらいを次のように語る。

「1つの教育活動ですべての資質・能力を育成することは難しいため、どの教育活動で、どんな資質・能力を育成するのかを明確化した上で、様々な教育活動に取り組む必要があります。先生方がそうした意識を持ちやすくなればと思い、教科や特別活動の枠を超えた観点を設定しました。今後は、授業や特別活動などを通して、生徒に『学びのTarget』の内容をどう学ばせるのか、具体的に検討しようと考えています」

写真　19年10月の「教科横断推進研修」では、教師たちが各教科団で試作した教育課程編成表や各教科の新学習指導要領などを参照しながら議論。研修の最後に、グループごとに練り上げた「教科横断MAP」（**図3**）を発表した。

生徒の実態に応じた工夫で、キャリア教育を充実させる

既存の取り組みも、資質・能力の育成の観点から見直した。その1つが、3科が共通して全学年に設置する学校設定科目「キャリアプランニング（以下、CAP）」で行われているキャリア教育だ。以前はプリントを用いて、職業の内容を調べる学習などが中心だったが、19年度からは、生徒の実態に応じて各学年で取り組みを工夫している。例えば、19年度2学年の1学期には、SNSの活用方法を取り上げ、SNSでのトラブルについての新聞記事を読解・要約させたり、グループでSNSの活用方法を議論させたりしたと、「CAP」担当の坂本泰三先生は話す。

「新聞記事を読解・要約すれば『習得力』、議論をすれば『表現力』や『思考／判断力』などの育成につながります。『CAP』を通じてどんな資質・能力が育成できるのか、学年団で協議し、取り組みを充実させています」

20年度3学年の「CAP」では、「発見力」「分析力」などを向上させるため、生徒が御殿場市の課題と向き合う探究学習を導入する予定だ。

資質・能力の評価方法の検討に力を入れていきたい

一連の指導改善の成果は、大きく実を結んでいる。例えば、生徒が学習内容を深く理解しようと授業中に積極的に学び合いをする姿や、授業内容を休み時間に友人に質問する姿が見られるようになった。また、定期的に実施する「高校生のための学びの基礎診断」では、学力を伸ばす生徒が増えている。資質・能力ベースの指導によって学習意欲が高まり、それが結果に結びついていることがうかがえる。

3科間での連携が進んだことも、大きな成果だ。19年度からは、3科の協働による商品開発に挑戦していると、工業科の坂本貴志先生は話す。

「まず、生活創造デザイン科の生徒が、商品となる料理を作り、そのパッケージをデザインします。そして、創造工学科の生徒がデザインを形にし、創造ビジネス科の生徒が販売戦略などを練り上げます」

今後は、資質・能力ベースの指導改善をさらに推進していく。

「本校の指導改善は緒に就いたばかりであり、資質・能力の評価方法の検討など、課題も少なくありません。今後も先生方と議論を重ね、全校体制で取り組んでいきたいと考えています」（渡森副校長）